

2023年4月2日 No. 3661 週報上掲載

先週の講壇から `キリストを宣べ伝える`

コリント人への第2の手紙 第4章1節～6節

聖句「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるキリストを宣べ伝えています。」(4:5)

1. 《バロメーター》 教会では「伝道の成果」の有無として「教勢」の増減が語られます。

「教勢」とは、現住陪餐会員数、献金額、諸活動です。それらをバロメーターとして推し量りながら「教勢が上っているな」とか「教勢が落ちているな」とか言って評価するのです。それが即ち、牧師に対する評価となり、責任を取って牧師が辞任したり、解任されたりする場合すらあるのです。

2. 《見えないもの》 人間は「目に見えるもの」の評価に囚われてしまうのです。その点、信徒も牧師も変わりません。創立記念日に主の恵みに感謝しようとしても歴史の長さ、会堂の立派さ、信徒数など目に見えることばかり並べていました。物質的な恵みばかりを「神の恵み」と唱えるのであれば、御利益信仰と何ら変わりません。4節「この世の神が、信じようとはしない人々の心の目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光を見えないようにしたのです」。むしろ、私たちが未だ気付いていない何か、目を留めることなく見落としている何かが大切なのではないのでしょうか。本当の「宝は土の中に隠されている」のです。

《十字架の宣教》 私たちは他所を羨んだり、無いもの強請りをするのではなく、与えられている持ち場の中で、本当の「福音の光」を共に尋ね求めたいと思います。この20年間に、米国では穏健な主流派教会が衰退し、トランプを支持するような原理主義的な教会が教勢を伸ばしました。そこで語られるのは「成功談」や「立身出世談」です。人間の思いを優先させ、人々の願望にターゲットを合わせて「人集め」に成功しているのです。しかし、そこに「十字架につけられたキリスト」は居られるのでしょうか。それを宣べ伝えようとすると、十字架は「躓き」であり「愚か」なのです。でも私たち、信仰者には、そんな十字架が光り輝いて見えるのです。だから、私たちは「十字架のキリスト」を宣べ伝えるのです。

朝日研一朗牧師